

Economic Monitor

所 長 三輪裕範 03-3497-3675 miwa-y@itochu.co.jp
主任研究員 丸山義正 03-3497-6284 maruyama-yo@itochu.co.jp

7～9 月期の輸出は低調推移、純輸出は GDP 成長率を押し下げ

7～9 月期は、輸出が新興国向けを中心に低調推移の一方、消費税率引き上げ前の駆け込み需要も寄与し輸入が堅調。輸出低調と輸入堅調により、貿易赤字は再拡大し、純輸出は7～9 月期の GDP 成長率を押し下げ。新興国向け輸出は、中国向けが持ち直すも、ASEAN 向けを中心に振るわず。

9 月及び 7～9 月期の輸出は低調

財務省が公表した 2013 年 9 月の貿易統計によると、輸出額（名目輸出）は前年比 11.5%（8 月 14.6%）へ伸びが鈍化した。財務省試算の季節調整値でも、9 月は前月比▲0.3%（8 月 2.2%）とほぼ横ばいにとどまる。9 月は輸出物価指数が前月比 1.0%と小幅上昇しており、物価変動を控除した実質ベースは、名目ベースよりも更に低調となる。当社試算の実質ベース季節調整値は、9 月に前月比▲3.2%（8 月 5.1%）と急減した。9 月の輸出は極めて低調に推移したと言えるだろう。

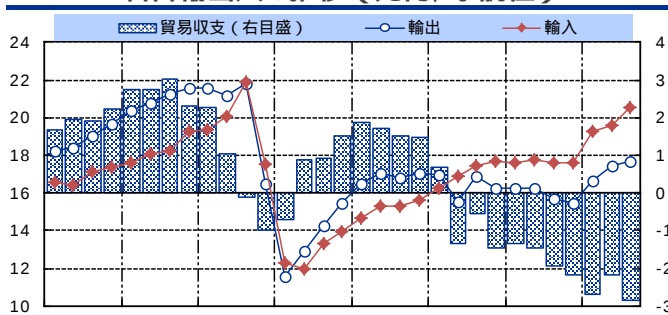
輸出の低調推移は、7～9 月期で見ても変わらない。名目輸出は前期比 1.4%（4～6 月期 4.8%）へ減速し、実質ベースでは 0.2%（4～6 月期 1.7%）とほぼ横ばいにとどまっている。

中国向けが持ち直すも ASEAN や NIEs、ロシア向けが振るわず

こうした輸出の低調推移の主因は、新興国向け輸出の低迷と考えられる。当社試算の実質輸出で仕向け地別動向を見ると、7～9 月期は EU 向けが前期比 6.7%（4～6 月期▲0.4%）と一人気を吐く一方、米国向け▲1.4%（4～6 月期 7.7%）、アジア向け▲1.2%（4～6 月期 2.0%）、中東向け▲5.3%（4～6 月期 10.5%）、ロシア向け▲12.5%（4～6 月期▲10.6%）と軒並み減少した。このうち、米国向けは 4～6 月期急増の反動が大きく、また主力の自動車も底堅く推移している点に鑑みれば大きな懸念はない。また、中東向けも 4～6 月期急増の反動と考えられる。それに対して、アジア向けとロシア向けは先行きが懸念される。

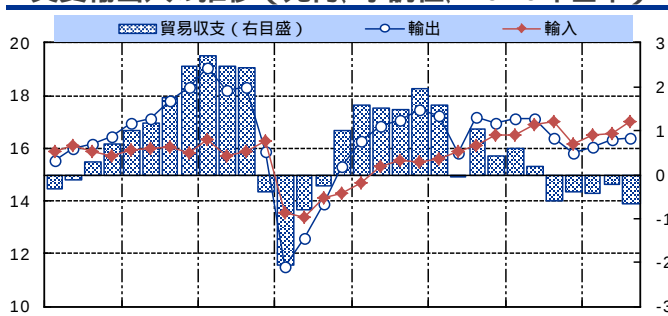
アジア向けの内訳を見ると、景気底入れの動きが見られる中国向けは前期比 2.7%（4～6 月期 3.7%）と 3 四半期連続で増加し持ち直しつつあるが、ASEAN 向けが▲7.3%（4～6 月期 1.3%）、NIEs 向けも▲3.8%（4～6 月期 3.0%）と大きく落ち込み、全体を押し下げた。現地生産の深化などにより日本との貿易構造が

名目輸出入の推移（兆円、季調値）



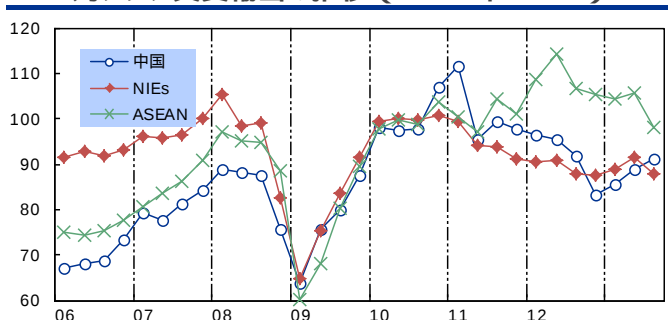
（出所）財務省

実質輸出入の推移（兆円、季調値、2010年基準）



（出所）財務省、日本銀行

対アジア実質輸出の推移（2010年=100）



（出所）財務省、日本銀行

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、伊藤忠経済研究所が信頼できると判断した情報に基づき作成しておりますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。記載内容は、伊藤忠商事ないしはその関連会社の投資方針と整合的であるとは限りません。

変化している可能性もあるが、域内の一部の国々で景気減速が鮮明化している影響が大きいと考えられる。世界全体をカバーする訳ではないが、OECD 景気先行指数でも先進国の景気循環が上向く一方で、新興国の景気回復が進んでいないことが示されている。

輸入は総じて堅調

一方、輸出とは逆に、9月の輸入額（名目輸入）は前年比16.5%（8月16.0%）へ伸びを高めた。季節調整値でみると、輸入は、名目ベースが前月比3.8%（8月0.2%）、実質ベースも2.7%（8月1.7%）と共に高い伸びを示し、堅調である。四半期で見ても、7～9月期は名目ベースが前期比4.6%（4～6月期0.3%）、実質ベースも2.9%（4～6月期0.3%）へ伸びが加速している。7～9月期の実質輸入を、品目別に見ると、鉱物性燃料（4～6月期前期比▲0.9%、7～9月期▲1.8%）が減少したものの、他は生産財、消費財、資本財のほぼ全てが増加しており、拡大が鮮明と言える。消費税率引き上げ前の駆け込み需要が、生産財輸入を中心に輸入の押し上げに寄与している可能性もあるだろう。

7～9月期に貿易赤字は再拡大

輸出の低調と輸入の堅調を受けて、9月の季節調整値ベースの貿易収支は▲1兆913億円となり、8月の▲8,208億円から赤字幅が膨らんだ。7～9月期で見ても▲2兆8,453億円（4～6月期▲2兆1,759億円）へ赤字幅が大きく拡大している。4～6月期は一時的な輸入の低迷により貿易赤字が縮小したが、7～9月期には、堅調な内需を受けた輸入増加を主因に、貿易赤字が再拡大している。10～12月期も、消費税率引き上げ前の駆け込み需要などを背景に、輸入の増加が続き、貿易赤字は高水準が続く見込みである。

純輸出は7～9月期の成長率を大きく押し下げ

実質ベースで見ても、7～9月期は貿易赤字が拡大しており、当社試算では4～6月期の3.3倍に膨らんだ。そのため、7～9月期に外需（純輸出）は成長率の大幅な押し下げ要因となる見込みである。基礎データが揃う前のラフな試算ではあるが、純輸出は7～9月期の実質GDP成長率を前期比0.4%Pt程度押し下げると考えられる（4～6月期は0.2%Ptの押し上げ）。

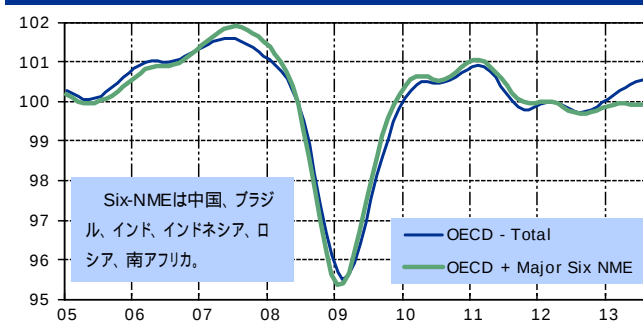
7～9月期は、設備投資や公共投資の拡大が期待されるものの、上述の外需の下押しに加え、4～6月期まで成長のけん引役であった個人消費がスピード調整により横ばい程度へ鈍化すると見込まれることもあり、実質GDP成長率は4～6月期の年率4%から年率2%前後へ減速すると考えられる。

仕向け地別の輸出動向

EU向けが機械関連を中心に拡大

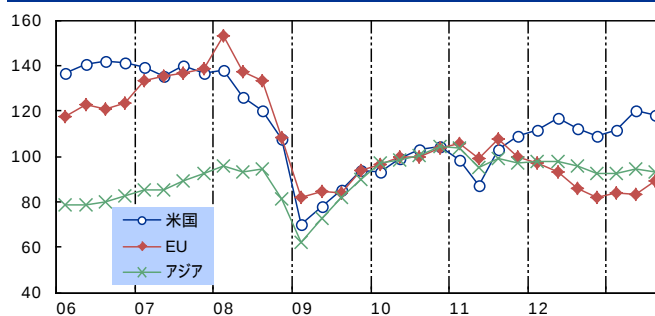
当社試算の実質輸出に基づき、7～9月期の仕向け地別輸出動向を見ると、既に述べたようにEU向けが一人気を吐いている。EU向け輸出は7～9月期に前期比6.7%（4～6月期▲0.4%）と大幅に増加し、ボトムの昨年10～12月期からは8.6%も水準を切り上げた。内訳を見ると、輸送用機器（7～9月期前期比

OECD 景気先行指数（長期平均=100）



(出所)OECD

地域別実質輸出の推移（2010年=100）



(出所) 財務省、日本銀行

18.0%) やはん用・生産用・業務用機器(5.8%) 電気機器(7.5%) など機械関連が総じて高い伸びを示している。財政問題が燃えるため、EU の経済成長には今後も多くを期待できないが、当該地域の経済成長、日本からの輸出とともに最悪期は脱した可能性が高い。

米国向けは反動減も底堅い

米国向けは、7~9 月期に前期比▲1.4%(4~6 月期 7.7%) と 3 四半期ぶりに減少した。但し、4~6 月期までの増加もあり輸出水準は高く、また主力の自動車が含まれる輸送用機器が 1.9%(4~6 月期 11.8%) と 4 四半期連続の増加を確保するなど、基調は上向きである。7~9 月期の減少を重視する必要はない。

中国向けの拡大を ASEAN 向けと NIEs 向けが打ち消す

アジア向けは 4~6 月期に前期比 2.0%と持ち直したが、7~9 月期には▲1.2%と再び減少を余儀なくされた。中国経済の底入れに加え、日中間のトラブルの影響緩和もあり、中国向け輸出が機械関連を中心に 2.7%(4~6 月期 3.7%) と 3 四半期連続で増加したものの、ASEAN 向けが▲7.3%(4~6 月期 1.3%)、NIEs 向けも▲3.8%(4~6 月期 3.0%) と大幅に減少し、全体を押し下げた。ASEAN 向けは、資本財や生産財、消費財が軒並み落ち込んでいる。NIEs 向けははん用・生産用・業務用機器が伸びたものの、電気機器や輸送用機器が減少した。